

45 瓦屋情話

琉球王朝の昔、沖縄で屋根の瓦ね。あれ、本土の瓦と違って沖縄のは赤い瓦でしょ。獅子頭が上にあるでしょう。戦前はね、侍の方々は全部瓦葺き。そしてね、普通の平民は、下級の侍まではね、端ばかりが瓦で上は茅ではみだれ瓦といっているんです。で、百姓の場合はね、全部茅葺き。この三段階に分かれていたんですよ、昔は。

そしてね、この沖縄でね、この焼物ね、瓦。これを作るとね、一番最初はこの沖縄では瓦。屋根瓦がたいへん重要視されたんですよ。住居だから、衣食住だから。まず最初に重要だからね。この、屋根を葺く瓦をね、最初作った時によ、唐の国からね、瓦職人が沖縄に来たんですよ。そうしたらね、この瓦職人はね、毎日瓦を焼くんでね。沖縄の王朝の王様に仕えてね、瓦を焼いていると。そして、その瓦焼きながらね、ホームシックにかかってしまつてね。

「もう中国に帰るよ。もう沖縄寂しいから帰るよ」というふうになつてしまつてね。で、その方に帰られたのでは大変だといつてね、いろいろと要求を聞いてね。「あんたの希望に添えるから、どうぞ沖縄のためにね、この琉球のために瓦職人として頑張つて下さいよ」と言つてね、留めていたらしいんですよ。

そしたら、ある時にね、
「もう帰らなくていいよ」ということになつたらしいんだな。なぜならばね、沖縄のね、昔の琉球の娘、美人を見かけてね、
「これを妻に貰いたい。そしたらね、私は帰らなくてもいいよ」ということになつてね。この、帰るのを思い留まつたということですよ。そしたらね、王様は、
「あんたがね、それだけ、今まで帰りがつたのがね、留まつてもいいというならね、あんたの要求はいくらでも聞いてあげますよ。何なりと遠慮なく言つて下さいよ」ということだね。

「その女がたいへん美人で気に入っているから、その女をね、嫁にさしてくれ」と言つてね。そしたらね、早速王様がね、家来を使つてこの女を探しに行つてみ

たらね、旦那さんがいる人妻だつたらしいんですよ。それでね、

「これはもう困つたなあ。相手は旦那もいるし、人妻であるんでね、これはたいへん困つたなあ。それ以外に、独身の女性でも何とか代えてもらえないかなあ」ということだね、お願いしたらね、

「いやいや、必ずこの女がいい」ということで、
「これ、好きになつたよ。好きだから」ということでね。仕方なくね、あの時分、百姓はたいへん気の毒でね、差別をされていたわけだから。この、とうとう王様の命令で、家来に言い付けられて、人妻を引き裂いてね、唐の人に、瓦焼きの職人に与えたんですよ。

そしたらね、その、いくらおいしいものを食べて、御殿でね、職人だといって、きれいな着物を着てね、のんびり奥さんに納まっているよりはね、もとの寂しい百姓の家でも、自分の愛する夫といつしよにいるのがね、何においても素晴らしいんだといつてね。この唐の瓦職人の希望によつてね、無理矢理に引き裂かれてね、この方の家内に、奥さんになつてしまつたんですよ。

そして、毎日瓦を焼く窯の上に丘があつたらしい。ここに上つてね、自分の恋しい夫のところにもいつも前に向かつてね、南に向かつてね、いつも自分の恋しい夫をね、偲んでいたんだけど。島の浦は見えるけれども、この夫が見えないなあと毎日泣き明かしていたということだね。

この沖縄の古典の音楽の中にね、『からやついじめぶてい、まへんかていみりば、しまぬらどうみゆる、さとうやみらぬ』と。瓦屋の家の屋根に上つて、南のほうを向いて見るけれども、その自分の島のね、島浦は見えるけれども、恋しい男は見えないなあと、毎日泣いて暮らしたそうですよ。それが沖縄に残るカラヤノ節の本当の情話ね。

類話

字名城 新垣武登

字糸満 野原由宗